

幼児期の子ども理解と保護者支援

那須野 康成

Child Understanding in Infancy and Guardian Support

Yasunari NASUNO

1 はじめに

近年の日本の子育て状況は大きく変化しつつある。特に急速な少子化の進行は平成16年をピークに、平成27年度では合計特殊出生率は1.45で、出生数は100万5677人となった。

その背景には、共働き世帯が平成4年を境に専業主婦と夫婦共働きが逆転し2015年では専業主婦が687万人、夫婦共働き1114万人となっている。それゆえ夫婦共働き家庭のそれぞれの状況に合った育児が十分行き渡っておらず、また地域の協同体の機能低下から地域の子育てサービスが追い付いていないため、子どもの発達の保障や保護者の子育て支援が不十分となっている。

そのため、今日では保育所、幼稚園、療育施設、民間事業所等の役割とその専門性が大きく期待されているが、一方では、子ども・保護者の支援にかかわる職員の質と専門性の低下が問われている。そこで、この論文では幼児期の心身の発達の理解の方法と保護者支援の方法を事例を交えながら考察し論ずるものである。

2 子どもの発達と発達課題の理解

(1) 発達とは何か

発達とは、人間が生まれてから死を迎えるまでの時間のなかで、人間の心身や行動が量的・質的に変化・変容していく過程とされている。量的変化とは、「身長が伸びた、体重が増えた、ことばの数が増えた」など量で表わす変化を言い、一般的には「あの子は発育がいいね」「成長したね」などと言う。

質的变化とは、体型の変化、思考の構造変化、知能の変化、言語表現の変化など量では表せないものを言い脳神経系の発達の質の変化を言う。発達はこどもが心身の発達に合わせ、健康で日常生活や社会生活場面に適応していけるように変化・変容していく過程でもある。

ゆえに、発達を促すために大切なものは適切な物的・人的環境であり、特に子どもからの発信力と周囲の人々(養育者・大人)の感受性(受信力)と適切な応答性が大切とされている。

(2) 定型発達と発達の個人内差の理解

発達は、子どもの年齢とその年齢に即した発達課題があるとされ、一般的に定型発達と呼ばれている。しかし、幼児期は個人の資質や育ちの環境などからくる個人内で起きる発達のアンバランスがあり、これは発達の個人内差と言われている。そこで幼児期の主な定型発達と個人内差を表で示す。

定型発達と発達の個人内差（表－１）

発達課題	主な発達内容	主な発達の個人内差
ことば	喃語、一語文、二語文など	ことばの遅れ、幼児語、不明瞭
運動（脚・手）	おすわり、立位、歩行、指使いなど	手の不器用さ、運動発達の遅れ
思考	記憶、創造性、推理、理解	特異的考え、理解・記憶が苦手
知能	記憶、言語理解、意思表示	知的な遅れ、言語の不理解
性格	積極的、消極的、短絡的	こだわり、孤立、多動
社会性	愛着形成、環境適応、状況理解	愛着不全、トラブル、状況不理解
遊び	一人遊び、並行遊び、共同遊び	孤立、集団不適応、トラブル
情動	場にあった情動行動、欲求不満耐性	パニック、激怒、場に合わない情動
感覚	視覚・聴覚・味覚・触覚・臭覚	感覚過敏、味覚異常、視覚優位

表－１に示すように子どもの発達年齢に即した発達段階の理解とその子どもが示す発達の個人内差を保育者は保育における自由あそび、子ども同士のかかわり、課題設定、行事などで一人の子どもをあらゆる側面から立体的に観察、記録することで、理解し個人の保育目標を具体的に計画することができる。

３ 乳児期の発達の保障と発達の危機

（１）乳児期の愛着形成と愛着形成不全

愛着とは、空腹、不快、不機嫌などの時に、泣く・呼ぶ・追いかける・しがみつなど、養育者に接近し要求を満たし、慰めてもらうことで養育者との間に安定した基本的信頼関係を形成し、養育者を安全基地として心の安定を図ることをいう。

愛着形成の基本は、養育者の敏感な応答である。子どもの泣き、叫び声、欲求、行動などの発信を感知・推測し、それに合わせた応答をすることである。例えば、①泣いている子どもを抱き、「おむつが濡れているのかな」「おなか为空く時間かな」と推測し、乳を飲ませると泣き止んだ（子どもとの応答が一致した）。②転んだ子を抱き上げ、打ったところをなぜながら「痛かったね」と慰めると、泣きやみ、しがみつ、にっこりするなどの一致である。

この応答の積み重ねが人間関係の基礎となり、自分は人に応えてもらえるとの「自己存在感」と自分は価値ある人との「自己肯定感」などの自己感覚が子どもの心に生まれる大切な時期である。しかし、人格形成を培う大切な乳幼児期に愛着形成が築かれなないと、後の人格形成や人間関係に危機が及び易い。

（２）愛着形成不全が疑われた事例

３歳児のＡちゃんは保育園に通い始めた最初から母親から離れることができず、毎日激しく泣き母子分離に時間がかかったが、保育者がかわり引き離すと母と別れ、しばらくすると園の雰囲気慣れ集団に入ることができた。しかし次の日も母親から離れられずしばらく泣いたあと、何事もなかったかのように他児と遊んだ、このような状態が１年間続き母親も保育士も苦労したが登園渋りの原因ははっきりしなかった。４歳児では母子分離がスムーズにでき保育園生活も順調だった。

しかし、５歳児になり再び登園渋りが強くなった。保育園長からの依頼により筆者と母親との面談が行われた。そこでは母親自身は結婚前から仕事に悩み、生活面で色々と自信を無くし

た体験が語られた。またAちゃんを出産後、実家の家族からAちゃんの育児について色々注意され、育児に対しても自信を無くしたことやAちゃんがあまり可愛くないことなども語られた。さらにAちゃんに妹が生まれると妹に手がかかりAちゃんの育児は祖母に任すことが多かったとのことだった。

筆者は面談の経緯から、Aちゃんの園での言動や母子とのやり取りなどから、愛着形成不全ではないかと考え、登園を嫌がる時は休ませ、妹を保育園に預け、しばらく母子が一緒にいる時間を作り一緒に遊んだり、外出したりしてAちゃんの言動を認め、褒めることを多くし安心して母親から離れられるまで根気よくかかわるよう保育園側と母親に提案し、その後も母親と定期的な面談を行った。

保育園では、登園した時は、まず担任とAちゃんとの一対一での信頼関係を深めながら、Aちゃんの言動を認め、活動では褒めることを多くすることとした。その結果、渋りから4か月を過ぎる頃から母子の愛着関係もでき、登園渋りも減少した。Aちゃんの言動に対し、母親や担任のタイミング良い対応がAちゃんの心の安全基地となった。

(3) 考察

筆者は、Aちゃんの成育歴から愛着形成時期にAちゃんからの発信力の弱さ、母親の応答性の悪さが重なり、また母親自身の結婚前からの仕事への悩みが結婚後の育児に影響し、育児に対する不安もあり育児に自信が持てず、また家族からの育児に対する注意がさらに不安感を増すなど悪循環となり、このことが3歳児での母子分離に大きく影響し、Aちゃんの分離不安が登園拒否(SOS)となって行動化したと考察した。愛着形成は養育者が主であるが乳児院での愛着形成を考えると、母親だけが愛着形成の対象者ではなく、乳幼児の発信力を見逃さずタイミング良く応答する感受性が保育者にも求められる専門性でもある。

4 幼児期(年少～年中期)の人間関係とその危機

(1) 養育者と個人及び集団との関係理解

少子化対策、雇用環境対策などの施策から2008年子ども・子育て支援新制度が施行され、共稼ぎ夫婦家庭やひとり親家庭の支援策として「待機児童0作戦」から保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園の充実が図られた。

その結果、最長11時間園で生活する幼児が見られるようになった。本来、幼児期の人間関係の発達は養育者との一対一関係から始まり、兄弟、家族へと拡がりを見せる。最初に幼児が人間関係を培う場は家庭であるがその家庭で過ごす時間が減少し、家庭での親子関係の希薄化が懸念される事態となっている。それゆえ保育者と子どもとの一対一の信頼関係の構築が重要である。

保育所保育指針及び幼稚園教育要領(平成29年告示)では、いずれも保育士、教師との信頼関係に支えられ自分自身の生活を確立して行くことを基盤とし、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感、充実感を味わう援助が大切であると謳っている。保育士、教師が園児一人一人の個としての特徴をつかみ、その特徴を生かした集団を形成しながら、人とかかわる力を育て、家庭との連携を図り、人間関係の発達を保障する支援と工夫が大切となる。

(2) 個人の特徴を踏まえ保育した事例

4歳児のBちゃんは生活場面では活動的でよく動き、トランポリンやシーソーなどの遊びが多くみられるが、担任を遊びの道具の一部であるかのように使い、担任と一緒に遊ぶ場面や他

児と遊ぶ場面はあまり見られなかった。筆者は幼稚園・母親からの依頼を受けBちゃんの園での生活の様子を観察した。結果、初めて経験することや初めて見る人などに対し、緊張や不安が高いことがわかった。また、担任や他児の言うことを耳で聞いて理解することも苦手であるし、周囲の動きに目が移り集中できにくい特徴などから、Bちゃんの園生活での困り感（SOS）が理解できた。そこで筆者は、Bちゃんの支援目標として①担任や他児と安心できる関係を遊びを通して作ること。②視線を合わせて活動の流れを事前に伝え、理解できたか確認すること。③イラスト、写真など使いことばと一緒に目で見て理解できる伝え方を工夫するなど提案した。

また保護者にもBちゃんの特徴を理解してもらい、家でも園と同じ方法でかかわることを提案した。結果、園での活動に変化が見られ過活動も減少し、担任に甘えたり、おんぶを要求するなど信頼関係ができ、遊びも他児と一緒に遊ぶなどの拡がりが見られるようになりBちゃんの困り感は減少していった。

（3）事例の考察

Bちゃんの対人的緊張や不安はBちゃんの気質や母親の応答性の苦手さなどに起因していると思われた。子どもの言動を理解する視点は、家庭生活での情報収集、園生活における子どもの困り感（SOS）を早期に把握する保育者の力にある。Bちゃんの場合、担任による特徴の理解と早期の支援計画の実践から、担任との緊張関係の解消や他児との関係の拡がり、親の協力による母子関係の改善などが見られBちゃんの園生活での困り感（SOS）が回避できたと考察する。この時大切なのは担任と保護者に信頼関係が構築されているかである、子どもの理解に違いがあると時には保護者とトラブルが生じやすいので、日頃からの関係づくりが大切となる。

5 就学前の準備（年長期）と小学校への接続と連携の保障

教育・福祉・医療の分野では近年、乳児期から幼児期、学童期、青年期までの一貫した切れ目のない発達の支援が主流になっており、それぞれの分野での連携の構築が各市町村で行われるようになった。ここでは幼保小連携の在り方について述べる。

平成29年告示での幼稚園教育要領第1章総則の第2では「（1）幼稚園教育において育みたい資質・能力」として、資質・能力を一体的に育む努力目標が①②③まで示されているので提示し、その内容を筆者なりに解釈する。

①豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」とある。豊かな体験の保障として、教師との信頼関係を基礎にあそびを通して、また教材の工夫や教育環境の整備などから幼児一人一人の資質や能力を見極め、幼児が主体的に環境と関わり知識や技能を高める教育の工夫を意味する。

②気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」とある。幼児は知的好奇心の盛んな時期であり、周囲の環境を積極的に取り入れ、ある課題に対し、試行錯誤しながら思考力、判断力、表現力を獲得していく。そこには教師の援助や励ましや工夫が必要であり幼児個人の年齢や思考の仕方、判断の仕方、表現方法を大切に、主体性や達成感を育む環境が必要である。

③心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」とある。幼児期は家庭環境と家族関係、園での環境と人間関係、地域環境と地域住民との関係など日々の日常生活の連続の中で、情緒、意欲、社会性が育つ。そのためには幼児を取り巻く人的、物的環境の連携が大切となる。

以上3項目を具現化し、就学前の幼児期を育む教育目標とする中で、次の課題である幼児期

から児童期への移行としての切れ目のない発達の保障が幼保小の連携と接続である。

(1) 就学前に不安を訴えた事例

C君は次年度就学する年長児である。保育場面では他児との共同遊び、集団行動や衣食などの生活習慣はほぼ出来ているが、集中力に欠け途中で遊びをやめたり、集団から離れ別方向に行ったりする様子があり、母親から筆者に相談の依頼があった。保育園に出かけC君の様子を見ていると、担任のことは掛けや他児のことは掛けが入らないことがあり、周囲の視覚刺激に動かされ行動してしまうことが園生活での観察でわかった。そこで、C君には活動するとき個別に声を掛けることや席を担当の前にするなどで目からの刺激を少なくする工夫などを提案した。また、保護者にもC君の特徴を伝え、就学時健診等で小学校に情報提供し、できれば保護者が親子で就学前に学校見学することで、C君に前もって学校生活の流れなどを理解してもらい、併せて集団登校の道順や教室の様子などもC君にわかりやすく伝えるよう提案した。また状況によっては、園長先生と一緒に学校訪問するなどして不安の解消に努めた。その結果4月無事にC君は就学することができた。

(2) 考察

筆者が支援しているT市は、就学前の情報提供・情報共有の場として、保育所、幼稚園、保健センター、行政、教育委員会、就学先の学校関係者、スクールカウンセラーが年2回合同の会議を開催し、就学前の気がかりな子どもについて、園での様子や保育方法、保護者支援などの情報提供と情報共有をし、親子が就学に対して不安を持たないように就学前からの学校見学、保護者相談を行いスムーズに移行ができるよう連携を強化している。

このような動きは、近年多くの市町村で取り組みがなされ幼児期から就労まで一貫した支援策が医療・福祉・教育・行政・労働との連携でなされるようになってきているので今後に期待したい。

6 保護者理解とその支援

(1) 保護者の育ちを支える

親とは、子どもの親であるが、子育てが出来て当たりまえではなく、親になっていく過程の存在でもある。また、子どもと一緒に育っていくものであるとの視点が大切であり、保護者が親として育っていく過程を周囲の人々の支援と支えが親育ちとなる。

特に発達障がいの子どものや、第一子の場合の子育ては不安や心配事が多く、身近に相談相手がいる場合は良いが、核家族、ひとり親家庭など孤立しがちな場合は、特に注意を払い地域の児童民生委員、保健センター、他の専門機関や保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園との連携が、親としての育ちを支える良きパートナーとなり支援する役割を担うことが大切である。

(2) 保護者とこじれる原因

保護者と保育者との関係がこじれる原因は、①保護者の話を保護者の立場で受けとめ、聴いていない場合。②双方に勘違いや誤解があり、客観的な事実の把握が出来ていない場合。③保護者の心理（不安・怒り・あきらめなど）や真意が読めない場合。④会話の多くを保育者が一方的に話している場合。⑤最初の対応が丁寧でなかった場合。⑥「あれができない。これができない」と子どもを否定的に伝える場合。⑦保育者側のコミュニケーション能力の不足・知識不足の場合。⑧保護者側に精神的な問題がある場合。などが挙げられる。保護者とのよい関係を作るには積極的に信頼関係を早期に作り、保育者を良き相談相手として保護者が認めてくれることである。

（３）保護者と良好な関係を作るには

積極的に良い関係を作る（ラポール）にはカウンセリングの受容、共感、傾聴である。その基本は、保護者の立場に立って保護者の気持ちを受け入れ（受容）、気持ちに寄り添い（共感）話の内容をしっかりと聴く（傾聴）ことである。しかしこれは初任者では困難な場合が多いため、学生当時からトレーニングをして自己研鑽することである。

保護者からすれば、「話すことができた」「聴いてもらえた」と実感できる関係がその後の保護者支援に繋がっていく。また、立場の違いがあれ、保護者・保育者ともお互い子どもを良くしたいと考えているとの視点を持ち、対立関係を作らないことも重要である。

保護者の日頃の活動の労をねぎらい、話しやすい環境作りに保育者は心がける必要がある。

（４）気になる子と保護者支援

先に述べた、定型発達と個人内差では、個々の子どもの発達状況や年齢により発達のばらつきが見られるようになる。保護者は自分の子どもと他児との比較から子どもの発達のばらつきが気になり不安を持つ。例えば、筆者が支援している就学前の療育施設に通う多くの子どもは幼稚園、保育所、療育施設と２か所の並行通園をしている。そこでの保護者相談で述べられる内容の多くは、園での集団生活で気になる様子として「注意欠如・多動」・「ことばの遅れ」・「他児との関係」「担任との関係」「給食」などである。

一方では、子どものことが気になっていても、保護者の経済的事情から療育施設での母子通園が負担となり、並行通園することで保護者のパート就労の時間が確保されるため保育所、幼稚園通園、民間のデイサービスなどを利用する保護者が増加している。

（５）支援をする時の視点

では、このような状況下での保護者支援をどうするか。保育所、幼稚園、療育施設との連携強化と情報共有である。子どもの発達のばらつきを保護者が理解するには時間がかかる。知的障がい、肢体不自由などの理解は目に見える障がいのため、保護者も理解し早期に療育支援するが、「注意欠如・多動」・「ことばの遅れ」・「他児との関係」「担任との関係」「給食」などは子どもの特性や心理的な側面であり、目に見えにくい状況である。子ども側からすれば日常生活での生活の困り感（SOS）であるため、保育者の日頃の観察や日常の保育から見えてくる具体的な様子を保護者に丁寧に説明することである。

筆者が支援する療育施設では、二か月に一回（土曜日）ファミリー交流会を行っている。交流会は11年続き現在も継続中で、夫婦での参加も多くなり成果を上げている。

この会の趣旨は、母親のみのグループ相談から、夫の子ども理解のなさや育児不参加に対する不満が多く聞かれたことから、父親の子ども特性の理解と育児参加により母親の育児負担の軽減が目的であった。両親の子ども理解の食い違いは、時には夫婦間の対立関係を生み、家族の危機となる場合もある。父親の協力を得ることは子どもの健全な発達を保障することであり、母親のみになりがちな支援を見直し、父親支援も大切な視点であると位置づけておくべきである。

（６）幼稚園での行動に不安を訴える保護者の事例

よく笑い、活発に動き回り、他児とのトラブルや先生の話や指示が聞けない４歳児のＤちゃんの幼稚園生活の様子から、母親の不安は高まりＤちゃんの将来が心配となり筆者との面談となった。母親からの情報では、Ｄちゃんは知的に高く言語理解や言葉の使用も年齢相応であった。しかし耳で聞いて覚えることや、長い指示は聞き取れない傾向にあり、逆に目で見て手本を確認しながら活動する方は良くできることであった。筆者からは母親にＤちゃんの特徴を具

体的に丁寧に説明し理解してもらい、幼稚園には週3日間通園し療育施設には週2日間通園することとし幼稚園、療育施設、保護者との連携強化と情報共有をすることで、Dちゃんの幼稚園での生活の困り感（SOS）を改善することとした。母親は療育施設に通うことで、Dちゃんの特徴の理解や具体的なかわり方を学ぶことで不安も軽減し、心理的なゆとりができることでDちゃんとしてしっかりかかわることができるようになった。また、父親にもDちゃんの特徴を理解してもらい、休日等は父子二人で遊ぶことや、家族そろって外出するなどの協力を求め父親も積極的に育児参加するようになった。

（7）考察

この事例は母親の性格から来る育児不安と対人関係の苦手さが根底にあった。ゆえに早期に母親と保育者との信頼関係の構築に努め、療育施設を紹介するタイミングを図り、幼稚園での方針や療育施設の支援方法に不信感を持たれないよう丁寧な対応と説明をおこなった。両親とも知的には高くDちゃんの生活の大変さを受け止め、夫婦で役割分担を決め協力関係を作ることが、その後のDちゃんへのよい結果につながった。この事例は好事例であるが、時にはなかなか子ども理解が得られない育児参加しない父親もいるが、時間をかけねばり強い支援と信頼関係が大切な事例もある。

7 おわりに

近年、育児が大きく様変わりし従来の方法では、子どもの健全な発達の保障が困難になってきた。特に乳幼児期の大切な時期を受け持つ保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園、各市町村における子育て支援事業など、地域で育て育み一貫した切れ目のない発達支援が主流となりつつある。それだけに保育者や専門機関の職員の質や専門性が問われるようになった。保護者と子どもが過ごす時間の減少が子どもの心身の発達に影響が出ないよう、この論文では愛着形成から幼児期までの発達の理解と発達の保障、保護者理解とその支援について述べた。内容の多くは筆者の長年の実践の積み重ねによる持論も含まれている。医療・教育・福祉・行政など幅広い知見が今後の子ども理解と子育て支援に必要となる。今後、子ども支援の専門家としてその専門性と質の高さがますます求められたため、保育者を目指す学生は在学中や就職後における自己研鑽が最も大切となる。

引用・参考文献

- 1) 青木記久代 編：発達心理学（2007）（株）みらい P34-45
- 2) 伊藤健次 編：保育に生かす教育心理学（2012）（株）みらい
- 3) 中島義明 他：心理学辞典（2008）有斐閣
- 4) 平松芳樹・池田勝昭 編：保育者が学ぶ精神保健（2007）（株）みらい
- 5) 那須野康成：愛知学泉大学・短期大学紀要第47号 発達障がい児の父親グループにおける意識の変化についてP83-87（2012）
- 6) 滝川一廣・小林隆児 他編：そだちの科学no.7（2006）「愛着ときずな」日本評論社
- 7) 公益財団法人児童育成協会監修：保育の心理学Ⅰ基本保育シリーズ⑧（2015）中央法規出版株式会社
- 8) 塚本美知子 編：子ども実践と保育実践（2013）（株）萌文書林
- 9) 厚生労働省HP（2010）21世紀出生児横断調査
- 10) 社会福祉の動向編集委員会編：社会福祉の動向2017（2017）中央法規出版株式会社
- 11) 社会福祉士養成講座編集委員会編：児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度（2016）中央法規 p60-65
- 12) 全国保育士会編：保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領～平成29年3月31日告示～（2017）社会福祉法人全国社会福祉協議会 p101-102

